パネルディスカッション

コーディネイター	宇都宮大学国際学部	中村祐司　教授
パ　ネ　ラ　ー	宇都宮大学農学部	酒井豊三郎　教授
	宇都宮大学工学部	今泉繁良　教授
	喜連川町区町会会長	西澤　守　氏
	喜連川町ごみ問題を考える会前会長	天野順子　氏

中村教授（コーディネイター）

まず始めに、西澤さん・天野さん・酒井先生の順番で、全体で２０分程度話をしていただいて、それを私が受けて今泉先生に入ってもらい、パネラーに質問などをしてその後、会場の皆様に率直な意見や質問などを出していただきたいと思います。後半はそれをベースにやって行きたいと思います。

西澤氏

私はごみ問題について何も係わっておりませんが、地域代表として意見を話して欲しいという事なので少し話をさせていただきます。喜連川町には小さな親切運動というものがございまして、私はその役員をやっている関係上、道路のごみ拾いを年に４回程実施しています。最近は少しずつ道路が奇麗になってきていますが、それでも空き缶・お弁当の袋などが散乱しています。あと家庭の生ごみや紙おむつが散乱して困っています。個人個人のモラルの低下、自分のところだけが奇麗になれば良いという考えがあるのではないかと思います。

10 年程前に役場の保健課にいた時に、生ごみを減らそうという事で職員間で検討して、生ごみのコンポストを薦めました。コンポスト化とは御承知とは思いますが、大きなバケツを逆さにしたもので、その中に生ごみを入れて処理するものです。プロジェクトチームを作りコンポスト作業をしたところ、生ごみが堆肥化されました。町にお願いしまして、１つ 8,000 円のコンポストの２分の１を町から補助していただき町民にお願いしました。それからは生ごみが減ったかと思います。コンポスト化の仕方でありますが、生ごみにビニールなどを入れないような注意が必要です。この後天野さんから話があるかと思いますが、EM 菌を使用すればもっと早くコンポスト化出来るのではないでしょうか。

私は山歩きが好きで良く歩くのですが、山にテレビ・冷蔵庫等が散乱していることがあります。昔は山にごみ捨場というのもがありまして、現在もその風習が残っているのではないかと思われます。町では粗大ごみを収集しているので、山に捨ててもらいたくないと感じます。「捨てる」はごみになってしまいますが、収集して分別すれば資源になりますので、何といってもごみ収集が大切かと思います。私共もそのように取り組んでいきますので皆様の御協力をお願いいたします。

天野氏

私がパネラーに選ばれたことは『ごみ問題を考える会』の活動を話して欲しいという事だと思いまして、会が出来た経緯・活動を話したいと思います。

昭和から平成に年号が変わった頃、1990 年代の初め頃から環境問題が深刻化してきて、私達女性団体の研修テーマも環境問題が重要課題として取り上げられました。私達は主婦ですから、家にいても直ぐに毎日出来る活動をやってみたいなという事で、生ごみの水切り運動とか、なるべく生ごみを出さない調理の方法とかをやってきました。

平成５年 12 月から平成８年の３月までの間、10 回古紙回収運動をしました。公民館の方に「古新聞・古雑誌・ダンボールを公民館の前に置かせて下さい」と前日の夕方伝えまして、また、役場の環境担当者に古紙回収業者を紹介していただいて回収してもらい、全町一遍には無理なので地域分けをして行いました。

そのような活動をしておりましたが、もっと積極的に生ごみを減らさなければいけないのではないのかと思いました。炊事を担当しておりますので、夏などは生ごみが直ぐに腐敗して汚い水が出ます。そのような物を水切り運動だけでなく他にないだろうかと考えていた矢先、微生物で生ごみが土としてリサイクルしているという事を知りました。リサイクルすれば、焼却しないで済みます。そうすればダイオキシンが減る。何とかしてこの方法を知りたいということで、町の公民館を通して県に情報を求めた結果、甲府市の女性団体がこの活動をしている事が分かりました。

平成６年 11 月に町の国内研修で視察しました。１日目に静岡県清水市の古紙で専門にトイレットペーパーを作っている製紙工場を見学しました。古紙回収をしていますので関心がありました。そちらでは、リサイクルされたトイレットペーパーを消費者が買ってくれないということを聞きました。２日目は甲府市の女性団体を研修したのですが、団体の女性は市街地の真中の高層住宅に住んでいる人達なので庭や畑を持っていません。使っている容器は小さい物で、生ごみを入れて EM ボカシを入れての積み重ねの繰り返しでいっぱいになってその熟成を待つので、容器の中はぐちゃぐちゃになっています。それを洗う外の水道が無いんです。その人達が生ごみを全部土にしてしまう活動を情熱的にやっていました。公園の片隅を借りてEMボカシを作り、各自のベランダに容器を置いて堆肥化をしていたのですが、「その出来た堆肥はどこの土に入れるのでしょうか？」その事を聞きましたら、農協女性部との連携でやっている活動でした。

私達には土があるのに、甲府市の人達に比べれば何てボンヤリしていたんだろうと思いました。そこで、翌月 12 月、１人 2,500 円で 25 名で 50,000 円で資材を集め、12 月８日町体育館で１回目のボカシ作りを行いました。それから今日まで全会員で一月も休む事なく続けています。休む事が出来ない！というのは、毎月３キログラムのボカシを配られなければ生ごみのリサイクルが出来ないからです。畑や庭の作物や花が堆肥を待っています。だから休む事が出来ないんです。でも、この活動が長く続けられた理由は、第一に厄介物であった生ごみが EM ボカシにより土その物になってしまう喜びです。第二に出来上がった土で、科学肥料や農薬を使わずに、安心で味の良い野菜や花が採れること、そして家族の健康につながる喜び。EM ボカシを使って作った野菜は食べて美味しいし、見た目にもたくましい美しさがあります。第

三に、EM でつながる仲間との一体感は手堅いものがあることです。夏場はスイカなどの水分の多い野菜が多い為、ボカシが普段より多くなるので、最低でも４５０キロは作っていると思います。ボカシを作るのは大変な作業でありますが、それを通して情報交換の場にもなります。そしてもう一つ、これが無かったら出来なかったのは、会員の熱意を役場が理解してくれた事です。生ごみを収集車に出さないとの約束を最大限にご理解してくれたことを感謝しています。

塩谷広域行政組合では生ごみは各市町で処分して下さいと言っています。自分の町で処分できれば焼却施設は必要ないので焼却はないですよね。ですからリサイクルでやるという事だと思います。各市町がやるとなれば、生ごみの量に見合ったプラントを導入する事になると思います。プラントを作るとなれば、私達の税金から用事しなければならないと思います。

生ごみには朝・昼・夜 EM ボカシを振りかけます。水分を取り除き、新鮮な内に処理しなければならないのですが、１週間経っても１０日経っても生ごみは元の姿のままで全く変わりません。腐敗がしないんです。還元の方向になりますから臭いは全然ありません。EM 菌は人間や植物等の自然界に対し、有害な作用を及ばさない有効微生物であります。しかし出来た物を土に入れると、数日から２週間位の間にものの見事な真っ黒な土になってしまいます。ふわふわな土です。立派な土から生まれた野菜は見た目にも立派で、測定器にかければ微量栄養素もきちんと含まれているそうです。近頃多くなっているアレルギー疾患は食生活の影響が大きいとの指摘がありますし、生活習慣病は薬では治す事が出来ません。食生活でしか改善できないとも言われています。人間にとって重要な環境・健康・医療・工業・資源エネルギー分野にまで広く利用できるのが EM 菌なのです。これからも私達は生活の安心安全のために一生懸命生きて行こうと思っています。

酒井教授

具体的な話を伺った後に、私みたいな立場では話しづらいのですが、私自身は地質学の分野でして、岩盤学などに関係する事をやってきました。今日はごみとは少しずれた格好で、ごみとはこういう事情が起きるのではないかという事を、お話させていただきたいと思います。

「ごみ、ごみ」と言いますが、ごみを処理した後の排水や、燃やした時に出る炭酸ガスもごみなんです。固体のものだけごみと扱っている限り、ごみの問題はトータルに解決出来ません。人間が生活していく上で、我々が不要かつ邪魔という物をごみと言うと思いますけれども、燃やす時にも、堆肥を作る時にもガスが発生します。そういうものもごみと扱っていきたい。極端な言い方をしますと、ボカシの容器を洗った時の水もごみ。そこまでトータルに考えないと、我々のごみ問題は、最終的にはどっかに話をおっつけてしまって片付いたような気分になってしまうのではないかと思います。

私達が生きていく上で、それだけでごみを作っています。私ここに来てから２度トイレに行きました。これも私の体から出したごみなんです。これは別のし尿処理といった格好で、それなりの処理をしなければならない。また、私はここに来るのに車で来ました。車で来る事によりガスを出します。これ

も実はごみを撒き散らしていることなのです。

もっと考えなくてはいけないのは、我々が普段生活していく上でいろんな事でエネルギーを使っています。エネルギーを使うと最終的には熱になります。熱になって地球を暖めているのです。そういう意味のエネルギー消費自体もごみを作っている、という事を考えないといけないんですね。今までに地球はいろいろな経験をしてきました。地球全体が凍りついた時もあり、地球全体の気温が 60 度近くまで上がったこともあると聞きました。我々はそんな状態では生きてはいられませんけれど、極端な言い方をすれば、そこまで生き抜くんだという事を念頭において、いろんな事をやっていかなければいけないんですね。特にガスにつきましては、炭酸ガスもさる事ながらメタンガスについては特に注意しなければならないんです。実はメタンガスの温室効果は炭酸ガスよりも一桁大きく、メタンが増えるという事は炭酸ガス以上に温室効果が高いのです。しかも厄介なことに炭酸ガスは水に溶けますがメタンはなかなか溶けてくれません。そのあたり踏まえて色々なことを考えなくてはいけません。強調しておきたいのが水も液体も気体もトータルでごみということを忘れないで欲しいということです。そして熱の事も忘れないで下さいということです。差し当たり固体のごみのことを掲げなくてはいけないけど。

中村教授(コーディネイター)

西澤さんの話の中で、道路や山の中にごみが捨てられているわけですよね。想像で申し訳ありませんが、それは喜連川の町民の方が落としたり町外の方が落としたりする可能があるわけですよね。近年の変化とか対策をお話願いたいのですが。

西澤氏

先程の話は国道 293 の話でして、他の市町村の皆さんが通過していくのが多いのでその方ではないかと思います。山林の投棄につきましては、町村境の山に多いんですよね。以前、役場に勤めている時にごみの中を探しましたら名前の札が出てきたことがあり、それを見ると他町の方です。

中村教授(コーディネイター)

モラルなどで訴えていくしかないですね。ごみ問題は自区内処理という原則がありますが、そこだけでは解決しないという問題があります。天野さんにお聞きしたいのですが、生ごみを土に戻していく事に行政などが指示してくれたという事ですが、今現在、こうした事をこうして欲しい、考えて欲しい、変えて欲しい等があればお話してもらいたいと思います。

天野氏

私達 10 年やってきた訳ですが､生ごみをリサイクルしていく運動ですので、もっと大勢の方が参加してくれればもっと効果があると思うのですが、会員の増やし方など苦労しております。10 年で 167 から８名。私達のやっている EM ボカシを町民の皆さんに理解してもらえたら､もっと増えるのではないかと思うんです。

EM というのは用途が幅広く､上下水道施設や再利用水の水質浄化衛生管理などを始め、農畜水産などの食糧生産などに活用されているんですね。世界

中の政府が EM 菌の発見者を呼んでやっている状況です。行政の方は、EM という特定の物で活動していくのには手を貸せないというとおかしいですが、世の中には肥料業者とか色々な職業で生きている方達の妨げになるような宣伝は出来ないということなんです。

私達はお友達を誘っていくという方法で会員を増やしてきましたが、もうこれでいいかなとも思うのですが、もっと奇麗にしたい、リサイクル社会にしたいので宣伝をしたいです。

甲府は、市街地の真中にある 10 棟位の高層住宅に住んでいる方の活動でした。この人達は土に返す喜びを体験出来ないわけですよね。それなのに一生懸命やっているところに感激しました。

今、町は来年３月に氏家町と合併する訳ですが、その協議事項の中に合併特例債を活用して、生ごみの堆肥化施設を作ろうという事が出ており、経費は４億円と載っていました。氏家町と喜連川町は人口４万人位になると思うんです。塩谷広域行政組合では自分の自治体で生ごみは処理して下さい、リサイクリ出来る物はリサイクルして自分の町で処理して下さいと、ここ２、３年言っています。焼却場もバグフィルターなどを補修修理して今はいい調子で動いてますが、焼却炉が老朽化してどうしようもなかったんだと思うんです。さくら市４万人の生ごみは、朝昼晩毎日出るわけですよね。さくら市として生ごみの堆肥化施設を作る予定がランクとして B ランクに上がっていますが、私は A ランクで真っ先にやらなければならない事業だと思っています。町民からは体育館や道路、電柱の地中化など色々上がっていますけど、そういう物より何より、毎日出る生ごみをどう処理するかの方が物凄く大切な問題だと私は思います。

中村教授(コーディネイター)

滝町長さん、ぜひ前向きにお願いいたします。先程、酒井先生より洗浄すればそれはごみになるという事でした。我々は北九州のエコタウンという所でゼロエミッションと言って、ごみは出さないんだという試みをやっている所を関心を持って見たんですが、ゼロエミッションという考え方については可能なんでしょうか。

酒井教授

ゼロエミッションは全部使い切ってしまうという事ですが、ただ熱のところまで考えると本当の意味でのゼロエミッションにはならないでしょうね。どんなに頑張っても、最終的には処分しなければならない物が出ます。多分これから後の話になるけど、今すぐに使う事にはならない物、そういう物を５年、10 年、50 年ときちんとうまく取っておけば、我々の後輩、子孫の力で資源として使えるかもしれないですよね。最終処分ではなく長期の保管場所という発想に変えた方がいいと思います。

今泉教授

先程のスライドにも書いておいたんですが、保管場所として考えてくれたらいいなあと思います。そういう面からいいますと、最終的に科学というものが人間にとって幸せになるものかどうかという事ですよね。私が学生時代東大闘争というものがあって、まさにそこを言われたんですよね。科学技術

とは本当に人間を幸せにして来たのか、公害を作っただけではないんですかと。日本経済が発展して水俣・川崎など公害を作った。そんな科学技術なんていらない。そのトップにある東大なんてぶっ壊してしまえ。それが大学紛争の基本だったんですよね。その後、科学技術が発展して公害問題に取り組むようになって、まだまだいろいろあるんですけど、それなりに対応していくようになりました。まだその延長上じゃないかなと思います。ゼロエミッションは基本的にあるべき姿だと思いますが、今すぐそのままでは駄目だという気がします。

生ごみをどういう風に処理をしているかとアメリカの方と話をしたのですが「日本ではこんなふうにごみを出したりして研究をしているんですよ」と言いましたら、「アメリカではカッターで粉々に切ってしまってそれを下水道に流してしまうよ」との返事でした。「流れる先は下水処理場でしょう？汚水処理は大変なんですよ、目の前からなくして処理を先送りにしただけではないですか」と話した事があります。地道な活動はやはり必要だと思います。長野県のある市では、市を上げて取り組んでいるところがあります。

中村教授(コーディネイター)

ごみを出来るだけ利用したり、なくしたりする為には、５～10 年先を見越して考えたり、また循環という形で捉え、取り組むことを考えていかなければならないと思います。今日の話の中で大きな地球規模の話が出てきたんですが、私なりに整理しますと、それは喜連川町の取り組み、あるいは市の取り組みと実はつながっている問題が凄くあるという事ですよね。そういう中で問われるのは、実践的な試みではないかと思います。色々な難しい問題はあるのだけれども、実践的な試みを今日は西澤さん天野さんから伝えていただき、ご指摘をしてもらいました。ここで感想でも結構です。何か会場から是非にですね、シンポジウムはとにかく会場の方々とのコミュニケーションを図る意味において、意見を出していただきたいと思います。この問題はこれで終わらずに、いろいろな意味でスタートになっているので、是非会場からの意見なり質問があれば大変ありがたいのですが。

会場（森田）

私は早乙女地区の森田と申します。ごみ問題で宇都宮大学さんが来ているという事は、以前に塩谷広域行政組合で次期ごみ処理施設の場所の問題で、高根沢の事で何か報告があるのかと期待して来ました。宇都宮大学は環境調査を依頼されているという事を聞いていたものですから、その結果報告でもあるのかなというような事で来ました。

中村教授（コーディネイター）

各先生方と多少意見が違うかもしれませんが私なりにお答えしますと、確かにその通りで、時期ごみ処理施設をどうするのかという事で、一昨年以来調査研究を進めています。その中間報告・全報告は塩谷広域行政組合のホームページや高根沢や各市町にアクセスしてもらうと、全てかどうか分かりませんが全部掲載してオープンにしてあります。その流れの中で今日のシンポジウムあるいは今までやって来たシンポジウムや、来週塩谷町での最終回を迎えるシンポジウムなんですけど、我々の調査など一番の教訓はごみの処理

場をどこに建てるのか、例えば高根沢町のどこに建てるんだという問題をですね、実はそこから入ってしまったら何も解決にならないんです。一番の課題というのはごみ問題をどうしようかという情報をオープンにして、住民の方と知恵を出し合い、そしてごみ処理場をどこに建てるのかという前提の問題の議論から始めないと進んでいかないわけでして、確かにご指摘の通りごみ処理施設をどうしていくのかという問題から外れています。前段からして、そういった事から始めようという問題意識で、シンポジウムを開かせていただいています。今日のような話の内容になったんですけど。

会場（森田）

抽象的な事も含まれていいんじゃないかという気持ちで聞いていたんですけど、ある程度は具体性を持ってやるという事も重要な事だと思います。我々は実際ごみ問題といいますと、氏家の松島の事が頭にあるもんでその事についてちょっと触れてもいいかなと思うんです。

北島教授

私は今日パネラーとか基調講演には出ておりません。先週高根沢町で基調講演という形で触れさせていただきました。抽象的といえば抽象的だと思いますが、もともとシンポジウムのどこに狙いがあるのかといいますと、基本的にはやや遠回りになるかもしれませんが、多分１番近道ではないかと思うからなんです。それは、ごみ問題を皆様方に、小入・早乙女・松島地区以外の方に認識してもらわなければ困るということなんです。そうしないと物事は解決出来ないし進みません。なんでそんなに認識してもらわないといけないかといいますと、今言った３地区の皆様の生活の負担によって、他の１市４町の３地区以外の地域の皆様は、朝起きて夜寝るまでの全ての生活が正常な生活と言っていいと思いますが、その正常な生活が３地区の皆さん方の負担によって営われているという事なんです。それを認識してもらわないと、高根沢町に中間処理施設を持っていっても、同じような問題が出てくると思います。今泉先生に写真でお見せいただきましたけど、最終処分の灰のところですね、灰の問題です焼却灰。小野町の皆様の負担によって営われているんですが、今裁判の係争中です。そう長く埋め立てていくという時間も無い訳です。今のように毎日 120t 出していきますと、松島では 80t の処理で、今２４時間フル稼働で運転していますから、３地区のご負担によって私どもは、受益を得ているわけで、強いて言えば利益を得ていると考えていただければいいと思います。

ですから先程天野さんや西澤さんのこれまでやられてきたそれぞれの実践的なごみの減量効果は、即、小入・早乙女・松島の皆様方の過重負担を少しでも軽減していくという事につながるんですよ。そのように共感し合わないと駄目じゃないかと思うんです。だから私どもはやや遠回りでありますが、まずはシンポジウムを開いて、そして「なるほど３地区以外の私達の生活は３地区の皆様方の苦しみによって成り立ち、正常な生活が営めている」という感謝の気持ちを、人間ですから必ず感謝する能力を持っているんです。共感しあえると私は先週言いました。そういう意味合いでこのシンポジウムを

連続的に開いたわけです。
　ここから中村先生がおっしゃったように、そうしていかないと同じ構造をいたる所で、中間処理施設がいつまでも問題を起こしていく、それはもう避けなければいけないんです。酒井先生がおっしゃったとおり、私どもが生活しますと必ずごみは出るんです。その事をふまえて、具体的に焼却炉をどこに作るんだという問題があると思うんですが、まずはここにおられる皆様方３地区以外の皆様方が、お帰りなった地区で「私達の幸せな生活は小入・早乙女・松島地区の皆様方によって成り立っているんですよ」と是非お披露目いただきたい、というのがシンポジウムの狙いです。塩谷広域行政組合管内の１市４町の全市民町民の皆様方は、公平平等に幸せになる権利があるんですよね。そこのところを是非。
中村教授(コーディネイター)
　他に会場から何かありませんか。
会場
　今泉先生のスライドの中に、ごみに減量化した人へのメリットという項目があったんですが、自分だけ良ければいいという考え方の人はまだまだいると思うんです。だけどごみの減量化に参加した事によって、何らかのメリットが入ってくるというような、そういったお話も有れば良かったかなぁと思います。また、天野さんのお話の中で生ごみが土に返るというお話もあったんですが、生ごみを少なくする為にはどうするかという事もあった方が良いと思います。必要以上に食事を作り過ぎないとか、あるいはコピー用紙を両面使うとかですね。空缶の中にもスチール缶アルミ缶とか有るんですけど、例えば自動販売機の所にジュースの種類ごとに、スチール缶入れとかアルミ缶入れというものがあってもいいんではないか。また自動販売機の隣に空缶のごみ置き場がない自動販売機を見かける事もあります。
　スライドの中にアメリカとか中国の写真があったんですけど、具体的に海外に限らず、日本の中でごみの考え方が先進的なモデル地区・都市のここの町ではこうする事によりこうなっているというような、ごみに対する住民の考えが方が進んでいる事の紹介があれば分かりやすいんじゃないでしょうか。
　１番は今泉先生の中にあった参加した人へのメリットという物ですね。
中村教授(コーディネイター)
　パネラーの方に今ご指摘があったと思うんですが。基調講演での今泉先生が一生懸命ごみをリユース・リサイクルに取り組んでいる人に対するメリットがあればいいという指摘がなされた件なんですけども、これまさに我々が突きつけられているテーマなんですね。その辺の事でどういうメリットがあるのか、天野さんの生ごみ処理について、西澤さんのコンポストについて、その事についてお答え願いたいと思います。その点について他のパネラーからも、短くですけどお答え願いたいと思います。減量化を具体的にどうしていくか、もしあれば具体例をお知らせしてください。
　私自身、全国を歩いて参りました。その中で、例えば沼津や名古屋とか北九州とか、事例はかなりありました。ここで紹介出来ないですが、そこの事

例はまだ完璧とは言えないですけど、考え方としてかなりモデルとなるような色々な工夫がなされていました。是非、別の機会に紹介出来たらと思います。

それではメリットについて、天野さんからお願いいたします。

天野氏

目に見えるメリットがあったからこそ、25 人の国内研修参加から始めた活動が 150 人にも 160 人にもなったんだと思うのです。メリットについては先程申し上げました通り、自分の手でフワフワの、地球が生まれた時の赤ちゃんのような、そのまんまの良い土が出来るということです。EM によって作られた土で農薬や化学肥料は使わない、素晴らしい、お見せしたいくらいの野菜が出来るんです。ずっと野菜作りをして来た人が、抱えきれない程の白菜などを作り上げています。それがメリットだと思うんです。そういう事があるから「私も入れて」と言ってどんどん会員が増えたわけです。年に一回の総会とか、ボカシ作りの時が情報交換の場となり、今まで交流のなかった年の違った人達とも、EM を使っての野菜・花作りでお友達が出来て、年賀状をやり取りなどしたりしているんです。

西澤氏

屋敷の小さな敷地の中で堆肥化出来るのがメリットです。

今泉教授

家庭ごみには、過大包装が多い訳ですから、アメリカのように過剰包装ディスカウントしてくれればいいなと思います。例えば、氏家町などでマイバックだとスタンプなどをくれる、そういうのも１つの方法だと思うんですよね。100 枚集めると 100 円と交換しますというのも良い方法だと思いますし、その場で１円とか５円とか引いてくれればだいぶ感じが違うんじゃないかと気がします。

昔だと空の１升ビン１本で５円くれたりして、子供の時おやつを買うとかありましたけど、それが１番分かりやすいと個人的に思います。

酒井教授

今、今泉先生が言っておられたことは、まさにそうだと思うんです。そういうシステムを作ってもらいたいという気持ちが前からあるんですけど、実は作ってあるけどうまく機能しないというところがあるようでして、私自身そういったシステムがあっても根がひねくれておりますから、大体において良い事というと途端にやりたくなくなります。多分私みたいなタイプの方もおられるんじゃないかと思います。親切の出来ない人間。だからといって自分にとって今みたいな話はどうなのかというと、自分自身が満足する事や親切をしたという格好でやると実は満足出来ないので余計な事をやる、お節介をして過ごす、ところ構わず気が付くとごみを拾うなどです。大学の中で拾っている時に、「なんであなたがやるんだ、みっとも無い」と言われました。みっともない事やっても親切ではない、実はお節介なんです。でも、そうすることが実は自分が満足するんです。こういう人間もいるという事も考えて頂ければ、親切だからありがとうでなくて、お節介ありがとうと言われるといいなと思っています。そういう雰囲気ができればいいなぁと私思っていま

す。人が親切だろうとお節介だろうと何かをやっている時は、出来るだけありがとうと言う事にしています。それも１つかなというふうに思っています。

中村教授(コーディネイター)

ありがとうございます。人それぞれいろんなスタンスがあるかと思います。

私は行政学を専門としているんですが、行政学上では政策の主体をつくるのは行政の専売特許ではないんですね、皆さんと我々が作るという事なんです。だから行政におんぶに抱っこではなく、例えば「どこに作るんだ、どうするんだ」よりも、実践をされてきた天野さん西澤さんの話のように「こういう問題にはこう考えるから是非行政が支援してくれ」という形でいく、そういうスタンスが必要だと思います。

実は今日のシンポジウムでは要約すると「大学の中のごみはどうなっているの」という事を突き付けられていると思います。大きな話も大切だと思うんですが、そういう事から始めて、できる事から一つずつコツコツと取り組んでいく。そして楽しく、まさにご指摘がありましたとおり、参加する事のメリットを表示してソフトやハードの部分も楽しくやっていこう、そういうふうな事を少し勉強させてもらった感じがします。我々の取り組みとしましては、打ち上げ花火的に終わるのではなくて、これをスタートとしてとらえますので、是非これからも色々な方々の意見を頂いてコミュニィケーションを図りながらやっていきたいと思っており、我々も一生懸命取り組んでいきたいと思っていますので宜しくお願い致します。今日はどうもありがとうございました。